

# 心と こころ



## 「ひろげよう こころをつなぐ 地域の輪」

社団法人

宮城県精神保健福祉協会 広報

### 精神障害者の 社会参加について

佐藤 竜太

今から八年前の平成七年はそれまで生きてきた私にとって大転換の年でした。つまり、その年に精神的な疾患を思い、余儀なく入院をしてみましたからです。また、その年は社会的に大きな出来事がありました。それは阪神大震災とオウム事件です。その事のショックが普段の生活のストレスに加わり、私に元々あった精神疾患の脆弱性が耐え切れなかつたきつかけになったのでしょう。加えて平成七年度はそれまでの精神保健法が精神保健福祉法と名が変わり改正された年でもありました。それは奇しくも初めて入院した日から現在に到るまで、その年に改正された精神保健福祉法によって援助されながら私は生きてまいりました。こうした平成七年に起きたさまざまな出来事は振り返ってみると今日の私にとって大変意味あることに思えます。

現在の私の一日は病院のデイケアを

利用しつつ登録ホームヘルパーとして微力ながら高齢者の在宅介護支援に従事しています。そこで先に述べた事柄から現在に到る経過の中で私が体験した事から感じてきた視点で「精神障害者の社会参加」について述べたいと思います。発症して入院した当時は個人的な状況から手順どおり生活保護の保障と精神障害者福祉手帳の交付を受けました。これによって社会生活の経済面は保障され福祉手帳を得ることにより、さまざまな支援（通院医療費の公費負担、生活保護の障害者加算、仙台市によるバス・地下鉄の無料乗車券の利用）を受けられることで退院後のリハビリ、生活訓練などを含めた社会生活を送れるようになりました。当事者として、これらの社会保障や支援を受けられたことに変満足しています。

幸いにもこうした保障や支援を受けられたのも八年前の法改正の為であり

私にとって平成七年が意味深いのも、このような為です。行政による社会復帰や社会参加の促進の為の支援は当事者にとって必要ですが生活保護制度の中にある収入認定に関しては多少の違和感を感じています。私は当事者において自立や社会復帰にはその為の資本が多少とも必要と思いますが収入認定がその意味において矛盾を孕んでいると思えます。収入認定は社会の公平性には必要だと思えますが実際の当事者の就労の場ではきびしいものと言えます。これまでの精神障害者に対しての福祉法の歴史の流れにおいて現行法は評価できるものと私は思いますが、これが与えて奪う様なものにならないよう願いたいと思います。

私は、これまで初めての入院から退院後の八年間に及び病院のデイケアに通って参りました。そのデイケアでは限られた病名を負った、さまざまな人達の出会いと交流があります。そういった場所での、さまざまな人達との交流をとおして「当事者の社会参加」についていろんな姿の形で示してくれる方々が居ります。自助グループの活動をとおして各方面で活躍される方、就労の為の求職活動に余念のない方、すぐに職場復帰される方、社会的入院か

ら退院して地域生活に戻られる方、などいろんな形で社会に働きかける方々が居ります。デイケアはそうした人々が集う、精神医療と社会の間にある情報交換の場所と言えます。

ある日、デイケアのメンバーが運営する病院内の喫茶室で自助グループの活動を行っているSさんと「障害者と生産性」について話し合った時の事です。その時彼は「障害者は企業でフルタイム働いて得る生産性は難しいけれど」と言った後、ある意味で障害者は「地域貢献」と「芸術的生産性」で社会に示すことが出来ると話していました。実際にボランティアや当事者主体の地域悩み相談であるピアカウンセリングなどで地域に貢献する方も居りますし、才能を発揮して絵画やいろいろな表現手段で活躍される方も居ります。私はその意見に賛同し障害者の社会参加に可能性を与える事だと思いました。そうした考えもある一方で精神障害者の中には社会的入院患者と言う社会と離れた方々が居ることも事実です。

実際、病院に根をはやして社会のストレスから離れて静かに生活を送る方々が居りますが、そうした人達から離れた社会は今、不況に加えて能率主義、グローバル化などと呼ばれた競争社会

が先行しています。それはあくまでも、一面的で一方では、環境や共同体などに配慮した精神的な生活を求める見方も語られています。だからこそ今、社

会的入院患者を含めた障害者の社会生活がそうした社会の要請にどのような意味を持つのか見つめて行かなければならないと思います。

## 「支援する会」の存在

Y · M

私は大学生時代（当時満二十一才）に、バイト帰りの交通自損事故により精神障害二級のダメージを受けるケガを八年程前に起こした仙台市在住の者です。その事故による私のケガの内容

故前後を比べるとあつたようです。記憶力・思考力・計算力等の知能面の低下はなく、日常生活における障害・問題はありません。

は、頭蓋骨（前頭葉部分）の粉碎骨折、それによる出血性脳挫傷、顔面（左ほお部分）骨折で、意識不明四日間というケガでした。ICUに約二週間、入院期間約二ヶ月でありましたが、幸いにも事故受傷後の発見されるまでの時間が早く、手術も成功しましたので、マヒはどこにもなく視覚・聴覚・味覚・触覚は異常のない状態まで回復する事が出来ました。しかし臭覚だけは全く失ってしまいました。ケガの状況からすればここまで無事に済んだ事は幸運だったと思います。ただ自覚はないのですが人格的な部分の変化が、事

事故当時は大学生（仙台市内に居住・通学）でしたが、在学中（一回生秋から）続けていたバイト先（レストラン）は入院中に店自体が営業中止となり、そのバイトは続ける事が出来なくなりました。その後（退院後）他のバイトも何業種か経験しましたが長続きせず、在学していた学校（私立大学の法学部）も卒業出来ずに中退、大手自動車メーカーの工場（首都圏に所在）に期間契約社員として就職しましたがそこも数ヶ月で退職。工場退職後約一年間首都圏で建設作業員（住み込み）として過ごし、帰仙後二〜三年間無職で何もする事なく時間が経過しました。

自宅に在る間は昼夜逆転・労働意欲欠如・目的意識なし・現状の問題に対する自覚もないという自堕落な生活でした、今思えば同居家族に負担をかけるだけの非常に悪い生活だったと思えます。そんな生活の中、定期的に通院していました、通院先（入院していたH・P）の医師の紹介で医療相談室を訪問し、そこで当時の相談室長・現在の私の所属組織（高次脳機能障害者を支援する会）事務局長と知り合いました。その出会いのおかげで当組織の最初に立ち上げた通所施設である「れいんぼう倶楽部（仙台市）」に開所と同時に通所出来る運びとなりました。その後クラス・アップの度に別の通所施設（二ヶ所どちらも仙台市内）開設と時を同じく通所し、現在は当組織の運営するグループホームで生活しております。（月夜・金朝がG・H、週末は実家）

ます。他者の瞳を意識せざるを得なくなった事で身だしなみも気にするようになりしました。通所以前は服は何日も変えない、入浴もろくにしない、髭も滅多に剃らないetcのが当たり前であったのに、そういった行動をとらないのが日常になりました。通所リハ参加以前と比較すると日常生活における運動量は比べものにならない程増加しました。障害者手帳の特典である「ふれあい乗車証」を所持しているので（仙台市内のバス地下鉄無料乗車証）通所時の交通アクセスはバス・地下鉄を利用しておりますが、施設での活動以外の部分での通所時間帯の運動は私にとってプラスになっていると思えます。当組織の最新の通所施設である「南光だい雲母倶楽部」に昨年から通所する事になり、この施設では今後老人デイ・サービスを運営する予定になっている為、そこで職員（メンバー・スタッフと称する他の二施設から選抜された通所者）として介護職に携わるので、組織側のアプローチでヘルパー研修に通い（短期の研修）ホームヘルパー二級資格を取得しました。またこれ以外にも色々な出会いもありましたし知識も増すという事が当組織と関係する事が出来たおかげで獲得出来ました。

ただこのような障害者の世界（障害者の実際・医療面・法律的側面・リハビリの現場）を知って実感したのは、この国では障害者がいかに不当な差別・偏見にさらされ、あろう事か法律的にも差別されているという事が分かった事です。当組織の通所者は障害者認定をされていたりされていなかったりの人達ですが、医療機関からすれば必要な医療処置は終わっているため入院の必要はない。医療有資格者による介護観察もいらないので、何らかのリハビリがなくては社会復帰・参加の困難

な方々ですが、前述の理由で医療機関には受け入れられないので、いわば医療のはざまにいます。このような人々の受け皿機関は必要なのですが公的には全く、民間にもほとんどないのが実情です。そういった組織はもつと全国的に（可能ならば各都道府県に）存在すべきだと思つたので、私見では国（又は地方自治体）が公立で常設するのが当然と感じます。それにより医療のはざまの人々を救えますし、障害者への理解・認知ひいては差別・偏見の解消にもつながつてゆくと思つています。

## ハードル

菅野 智子

私がこの病気になりはじめたのは二十歳頃でした。実際に、病院に通いはじめたのは平成七年十一月でした。最初は診てもらふことに、ためらいを感じましたが、実際に通いはじめると、

話し続ける私に、迷いはありませんでした

苦痛ではありませんでした。私が青木クリニツクの青木先生と出会って驚いたことは、こんなにも親身になってくださる先生は初めてでした。独り言、一人で笑ったり、正直このような事を

逆のぼると私は、平成六年四月から、白楡看護専門学校で通学しました。私は、二浪しましたが、九月で中退しました。やはり、独り言を言ったり、指がふるえたり、一人で笑ったりしていました。私は、夢でもあった看護師の道に半年で終止符を打ちました。当初は、くやしき気持ちもありましたが、今考えて

みまずと、後悔はありませんでした。一日一日がこんなにも長いと思える日はなかつたように思います。当然、周囲の目は冷たく感じましたが、あまり気にしませんでした。心の中では、ためらい、迷い、怒りなど何も無かつたように振る舞い続ける私でしたが、社会とはこういうものだと思われ降りがかかってくるようでした。私が最初に就いた仕事は、アパレル会社でした。厳しい規則の中で、約三年間働きました。お客様と接する販売員でしたが、かなり難しいものでした。十人十色とは言いますが、慣れはじめたのは一年が過ぎてからでした。私は接客するコツを覚えられました。それから、売り場での担当をもらいました。私は上司からたくさん叱られた方でした。そのような中でも、マインドコントロールをして、私は病気が悟られないように気を配ってきたように思います。しかし、知らず知らずの間に、少し症状が

でるときがあるので、私はそれを抑えることができないうように思います。この症状で、お客様からはクレームがあるかどうかはわかりません。お客様は神様と教えられてきたので、ストレスはかなり蓄積されていたように思いま

す。上司には、「薬が切れたので病院に行きます。」と言つても、「ドラッグですか」と、馬鹿にされた時もありました。上司は変わった人だったので、退職願を書いて辞めました。

次に就職した仕事先はコンビニでした。約二年間でした。私は接客業が好きなので、採用されて嬉しく思いました。ここでは、あまり症状がでませんでした。私は、七月に入社したので暑い時期でした。この会社では、同級生を入社させることができました。ところが、運命というのは恐ろしいもので、豹変してしまつたのです。プライベートと仕事では、大人柄が変わるので、優しすぎるといふ事は逆にマイナスになると思いました。イライラする事が多くなりました。ここで転職が訪れました。一人の女性と出逢いました。パートで入つて来たのですが、最初はあまり合わなかつたのですが、徐々に打ち解けるようになりまし。一緒に仙台に行つてストレス解消したり、私が落ちこんでいる時に励ましてくれて、立ち直ることができました。人生の恩人である一人の女性とは、今でも友達として付きあつています。これを機会に別な会社に入社しようと思ひました。

次は食品会社でした。色々な面で精神的に悩みましたが、約二年間でした。昨年六月に異常を感じて退職しました。そして、青木先生の紹介で、平成十五年三月から六月二十六日まで小島病院に入院しました。退院してから、人権擁護委員の先生に、保健師さんを紹介してもらいました。授産施設のぎくを紹介してもらいました。精神科に通院している私にとっては運が良かったと思ひます。家にもあまりすることがないので、本当に良かったと思ひます。

現在、試験通所していますが、一週間通所して多少疲れましたが、無理をしないように頑張りたいと思ひます。社会復帰するためには、色々御迷惑

をかけないように、わからない点に関しては、どんどん質問したいと思ひます。

二十一世紀が幕を開けてから三年がたとうとしています。私自身色々な事がありました。今考えてみると波乱万丈な人生でした。

私は、精神科に通院してからかれこれ十年になりますが、人生の分岐点でもある昨今、社会復帰への夢は一日一日を大事に過ごす事で道が開けてくるように思ひます。この十年間の中で、素晴らしい友人、先生と出逢えた事で一歩前進できたように思ひます。これからも、友人、先生を大切に、病気を克服して社会復帰につなげたいと思ひます。

## 社会参加をめざして

佐々木 睦子

私が統合失調症になって、十九年立ちます。現在は、薬の副作用で目が上転することがあり、また、嘔吐反射も頻繁に生じます。いつなるかわからないので、いつも不安ですが、十年もこの症状と付き合っているので、上転し

たときはサングラスをかけてその場をしのぎ、嘔吐には、ビニール袋を常に持参して備えています。

富谷町にY O U Y O U 作業所ができ二年と八ヶ月たちました。通所前の私は、週に一回保健所の患者会に参加

したり、月一回の町主催の患者会に参加するのがやっとでした。人の目を気にして自宅から出ることが恐かったのです。そのころは、母と衝突ばかりしていました。自分の行き場の無い怒りを母にぶつけていたのです。

作業所では、主に箱折作業を中心に、革細工、七宝焼き、絵画教室、農作業、アートセラピー、運動指導などをしていきます。

現在は男性三名女性三名が働いています。みんな病気の症状は同じではないので、一週間休む人もいれば、毎日休まず出席する人もいます。途中で帰るときもあります。私も初めはなかなか慣れず、体力的にも疲れやすいので、週二日程度休んでいましたが、次第に余裕も出てきて、今では、お弁当を自分で作ることも出来るようになりました。作業所内の仲間の性格もだんだん理解でき、悩み事の相談に乗ったり、たわいのない事で笑ったりしています。また、自宅での生活も穏やかにになり、母との衝突もなくなりました。作業所の仲間と付き合っていくことで内にももっていた気持ちも、発散できたのだと思います。

創作活動で作った製品をバザーやイベントに出展して活動することもあり、

指導員さんたちと一緒に、一般の人たちに混じって販売を行っています。その時は、多少緊張しますが、社会参加というよりは、勇気を出して自分の心のバリアを開こうと思ひ、なるべく笑顔で（多少ひきつりながらも）がんばりました。その度、「自分で殻に閉じこもっているなあ」と感じます。「自分はこの病気だから」とか「昔は出来たのに」、「目が上転して変な目で見られていたのではないか」など、考えなくてもいいことまで気にしてしまいます。もつと気にせず普通に出来たらいいなあと思います。

先日、一般企業で職場実習を行ってきました。その会社は、以前Y O U Y O U作業所にいた友人が正社員として働いている所です。その友人はY O U Y O U作業所にいるときはまるで別人のように生き活きしていました。仕事を自分一人に任せられることの責任などからくる充実感が、人を成長させるんだなあ、とつくづく実感しました。その成長をうらやましく思い、また、これからはがんばって欲しいと思いました。社会復帰は、普通の人と気持ちが一緒になることなんだと、考えています。それと多少の忍耐も必要だと、話はそれますが、遊ぶことも大切な

社会参加・社会勉強になると感じています。普通の人と一緒にスポーツしたり、普通の友だちと行動したり。友達と付き合っていくことも大切だと思ひます。ただ単に何処かに通所するといふだけの人生ではなく、生活の幅を広げることは素晴らしいことだと思うのです。

将来のことは、具体的にはまだ、未

## 「みんなの輪の会」に入って

佐々木 ひろみ

私が理由あって、埼玉県熊谷市から

津山に戻って来たのが二十九歳の時。

早いもので、今から十数年前の事である。その時、成沢さんから、初めて声をかけられた。

「これから津山に作業所を作りたいと思うんだけど、ひろみちゃん作業所に来る気ある。」と

これが、私と成沢さんの出会いである。私はすぐに、「行ってもいいんだけど、お母さんに聞いてみないとわからないよ。もし、お母さんがダメだったら、お母さんを説得して。」と。

そして、成沢さんにお母さんを説得

定ですが、Y O U Y O Uのメンバーが一人一人自立して、社会に出てそれぞれ自分なりにがんばって欲しいです。私も一人の障害者としてではなく社会の一員として、仕事が出来るようにここを巣立っていきたいです。それまでに、この作業所で体力と気力を充実させ、これから向かって前進していきたいです。

してもらい、行くようになった。

始めは、メンバー三人（私、Kちゃん、志津川のEさん）、スタッフは渡辺課長、成沢さん、登米保健所の田代さん、仙台の大病院の栗田先生の七人で、仮称「たまごの会」を立ち上げた。

そして、メンバーも増えていって、月一回の集まり会を開いては、木工細工の木箱（六角形）を作っては組み立てたり、ヤスリでこすったり、ニスを塗ったりしていった。月一回の集まりは思考錯誤ではあったけれどメンバーのみんなと会えるのが、とても楽しみ

であった。話をするのも楽しかった。とても、やりがいがあった。

徐々に月一回の集まり会では物足りなくなり、週四日(月・火・木・金曜日)の水曜日休みにしようという事になり、月一回の定例会(たいていは第三水曜日)には、大学病院から先生を呼んで来てもらおう、という事になり、名前も決めた方がいいという事になり「みんなの輪の会」と全員一致で決まった。

当初、役場職員から畑を借り、じゃが芋・さつまいも・白菜・青菜をまいたり、また、割りばしの袋詰め、ウエス加工、と同時に社会参加をするようになった。本吉のオイカワデニムからは、ズボン(ジーパン、胸あてズボン、スカート等)の糸切り作業が五、六年前まであったが、この不況でこの仕事もなくなった。

合い間には、和紙での小箱作り(六角形)、ビーズや組みひもでのプレスレット作り、アクセサリー(犬・白鳥など)、牛乳パックでの丸椅子、ペン立て、広告紙(チラシ)での玉のれん、最近では玄米にぎにぎ、毛糸のたわし編み、荷物についてくるテープでの大小様々な長方形、正方形の箱作りなど、町での健康づくりと福祉のつどい、二

十四時間フリーマーケット、登米管内・歌津のかめ会との交流会、グラウンドゴルフ、講演会、全国精神障害者連合会(全精連)等の交流会、移動研修旅行などなど。

この輪の会も、指導員も現在で六代目であり、保健課の課長も七人前後、変わった。私も十数年の間、いろいろあった。苦しいこと、悲しいこと、つらいこと、楽しいことなど…。

私が一番つらかったことは、三ヶ月間自宅謹慎になったこと。その前は、二歳半で息子と別れたこと。これで「心の病氣」になった。でも、その前までは「この人達は恐い人達だ」と、偏見を持っていた。自分がこの病氣になるまでは…。自分もこの病氣になって、付き合ってみるといい人達で、普通の人と変わりなかった。

私が「輪の会」に入ってなかったら…。そして「輪の会」のスタッフ、メンバーと知り合わなかったら…。登米管内、歌津のかめ会のスタッフ、メンバーと知り合わなかったら…。各町の、いろいろな人達と知り合わなかったら…。大学病院の先生とも知り合わなかったら…。今の私は、いなかったらろう。

とにかく私は恵まれていると思う。

近所に、病気を理解してくれる伯母がいて、私は私の道を、マイペースで歩いて行こう、悔いのないように。息子に恥じぬように。これからも「輪の会」のメンバー、スタッフと仲良く付き合っていこう。

十七年には、合併にもなるし、作業所はこのままになるか、どうなるかわからないけれど私は私の道を、あせらず進むだけ。再婚する気もないし、悠々自適に過ごそう。私は相手に同情されるのも、するのも大嫌いだから、そんなことはほしくない。

けれど、成沢さんには感謝したい。「輪の会」に入れてくれたことに…。いろいろな行事にも参加ができたこと、これからも、いろいろな行事に参加してゆこう。できるだけ。

「輪の会」に入って、本当に良かった。



### 会員募集

本協会の趣旨に賛同される方は、だれでも個人会員として、また、市町村病院、会社、工場、婦人会等各種の団体は、団体会員としていつでも入会できます。入会を希望される方は、次のところへ申し込んで下さい。

〒989-6117 宮城県古川市旭

五丁目七二〇

宮城県精神保健福祉センター内

(社)宮城県精神保健福祉協会

電話 〇二二九(二三)〇〇二一

#### 会費

個人会費 年額 二、五〇〇円

団体会員 年額 一口(五、〇〇〇円)以上

#### 編集発行

平成15年11月発行

社団法人

宮城県精神保健福祉協会

宮城県古川市旭

5丁目7-20

電話0229(23)0021